

短鞘ネギ(仮称)栽培における作型の検討

塩野宏之・森岡幹夫

(山形県農業総合研究センター農業環境研究部)

Cropping Type For Short Sheath Welsh Onion, "Tansho-negi"

Hiroyuki SHIONO and Mikio MORIOKA

(Department of Agro-Environment Science, Yamagata General Agricultural Research Center)

1 はじめに

当センターでは、堆肥を活用した新しいネギの栽培方法を確立するため短鞘ネギ(仮称)に関する試験を実施した。短鞘ネギは、従来の長ネギ用(根深ねぎ)の品種を使用するが、堆肥の施用や密植等を行うことで、可食部である葉鞘が太く、短くなる。短鞘ネギのメリットとして、定植から収穫までの期間が長ネギに比べ約1ヶ月短く、本県産の長ネギより早く出荷できることや、短いため少人数家庭向けのサイズであること、などが挙げられる。この短鞘ネギ栽培を現地で普及するためには、栽培特性や作型を明らかにする必要がある。そこで、本報告では、露地栽培における短鞘ネギの作型について検討を行った。

2 試験方法

(1) 試験1 場内試験

2005年に当センター内ほ場(細粒褐色森林土)で実施した。前年春に籾殻牛ふん堆肥(現物あたりT-N 0.53%, C/N 28.7)を10t/10a施用し、試験年には無施用とした。施肥は有機入り被覆肥料(N-P-K:13-10-10)を定植直後株元にN成分で20kg/10a施用した。品種は「元蔵」および「秀逸」を使用した。試験区は1区20m²、単区制とし、は種日の異なる試験区を「元蔵」区は6区(1月21日~6月9日)、「秀逸」区は3区(2月3日~5月16日)設けた。各区ともチェーンポットCP303を使用し、1穴あたり1粒、2粒交互には種し、定植時のうね幅は66~70cmとした。

(2) 試験2 現地試験

2005年に寒河江市の現地ほ場(細粒灰色低地土、面積は84.5m²)で行った。施肥、防除は現地慣行、堆肥は籾殻牛ふん堆肥を2t/10a(現物あたりT-N 0.65%, C/N:23.6)を試験当年春に施用した。品種「秀逸」を2月3日には種し、4月18日に定植した。は種方法、うね幅は試験1と同様とした。7月19日と7月25日に収穫した。試験1、試験2とも、軟白長20cmを目標に土寄せを2~3

回実施した。

(3) 短鞘ネギの規格および調製

短鞘ネギの規格を、軟白長20cm、葉数を4枚、調製後の全長を45cmと定めた。収穫、調製後の階級は、LL:軟白部の葉鞘径が20mm以上、L:15mm以上~20mm未満、M:13mm以上~15mm未満、S:10mm以上~13mm未満、規格外:10mm未満あるいは奇形、病害発生株とした。

(4) 調査方法

目標の軟白長にほぼ達した時点で収穫調査を実施した。試験区ごとにうね1mあたりの本数、全重を3連で調査した後、調製し、階級別の重量を測定した。

3 試験結果および考察

(1) 試験1 場内試験

「元蔵」の結果を表1に示す。4月11日に定植した元蔵1区では、10aあたり商品収量は2.8tであった。階級別重量割合ではL品が36%、M品が48%とL、M品が中心であった。8日後の7月19日収穫時は商品収量も3.3tに増加した。階級別重量割合ではLL品が33%となり、葉鞘径が太いネギの割合が増加した。

元蔵2区~元蔵5区では、商品収量が3.0t~3.6tとなり、おおむね3t程度であった。元蔵3区、元蔵4区、元蔵5区の階級別重量割合は、いずれの区もLL品、L品の割合合計が50%以上となった。なお、元蔵4区では、収穫が8月下旬と軟腐病の発生が多い時期であり、規格外品の割合が他の試験区に比べ高かった。元蔵2区では、定植日から収穫日までの期間が他区に比べ1週間ほど短かったため、LL品の割合が少なかったと考えられた。また、元蔵6区では、12月上旬に収穫した場合、LL品が64%と多くなった。これより収穫を早くした場合、L品、M品の割合は他区と同様の水準になると考えられた。

「秀逸」の結果を表2に示す。秀逸1区~秀逸3区でも、10aあたり商品収量は2.9t~3.6tと、「元蔵」と同様におおむね3t程度であった。は種日と定植日が同一である

元蔵 3 区と秀逸 2 区を比較した場合、商品収量は同等であったが、階級別重量割合では元蔵 3 区の方で LL 品、L 品の割合が高かった。同様に元蔵 5 区と秀逸 3 区を比較した場合、商品収量は同等であったが、秀逸 3 区で LL 品が 44%と高くなった。定植が 5 月中旬、収穫が 8 月中旬の場合では、「秀逸」に比べ「元蔵」で葉鞘部の肥大が早いと考えられた。

(2) 試験 2 現地試験

現地試験の結果を表 3 に示す。10a あたり商品収量は、7 月 19 日収穫の秀逸 1 区で 3.3t、秀逸 2 区で 3.6t であった。階級別重量割合では、7 月 19 日収穫の秀逸 1 区で L 品が 50%、M 品が 23%と L 品中心であったが、7 月 25 日収穫の秀逸 2 区ではさらに肥大が進み、L 品が 54%、M 品が 8%となった。

4 ま と め

以上より、短鞘ネギは 4 月第 3 半旬から 8 月第 2 半旬にかけての定植を行うことで、7 月第 3 半旬から 12 月第 1 半旬まで継続した収穫が可能であり、定植から収穫までの期間は約 3 ヶ月、10a あたり商品収量はいずれの時期も 3 t 前後であった。

表 1 試験 1 における収量、品質(品種:元蔵)

(1m, 3 反復調査)

試験区	は種日 (月/日)	定植日 (月/日)	収穫日 (月/日)	収穫本数 (本/m)	総収量 (kg/m)	階級別重量割合(%)					商品収量 (t/10a)
						LL	L	M	S	規格外	
元蔵1	1/21	4/11	7/11	26.0	4.0	12	36	48	3	0	2.8
"	"	"	7/19	27.7	5.2	33	45	20	2	0	3.3
元蔵2	2/18	4/26	7/19	30.3	4.4	8	43	42	4	3	3.0
元蔵3	3/17	5/17	8/16	27.7	6.4	44	45	6	0	5	3.6
元蔵4	4/15	5/25	8/30	31.0	7.0	39	29	6	0	26	3.0
元蔵5	5/16	6/30	9/29	27.0	5.1	39	39	12	1	10	3.0
元蔵6	6/9	8/5	12/1	24.0	5.1	64	12	17	4	3	3.0

表 2 試験 1 における収量、品質(品種:秀逸)

(1m, 3 反復調査)

試験区	は種日 (月/日)	定植日 (月/日)	収穫日 (月/日)	収穫本数 (本/m)	総収量 (kg/m)	階級別重量割合(%)					商品収量 (t/10a)
						LL	L	M	S	規格外	
秀逸1	2/3	4/11	7/11	29.0	4.1	4	37	55	2	2	2.9
秀逸2	3/17	5/17	8/16	29.0	6.2	35	39	18	1	7	3.6
秀逸3	5/16	6/30	9/29	24.7	5.0	44	36	8	1	10	2.8

表 3 試験 2 (現地) における短鞘ネギの収量と品質

(1m, 3 反復調査)

は種日 (月/日)	定植日 (月/日)	収穫日 (月/日)	収穫本数 (本/m)	総収量 (kg/m)	階級別重量割合(%)					商品収量 (t/10a)
					LL	L	M	S	規格外	
2/3	4/18	7/19	27.7	5.0	27	50	23	1	0	3.3
2/3	4/18	7/25	27.3	5.8	36	54	8	1	1	3.6